



本日

新永代苑

二世
今世長者鑑

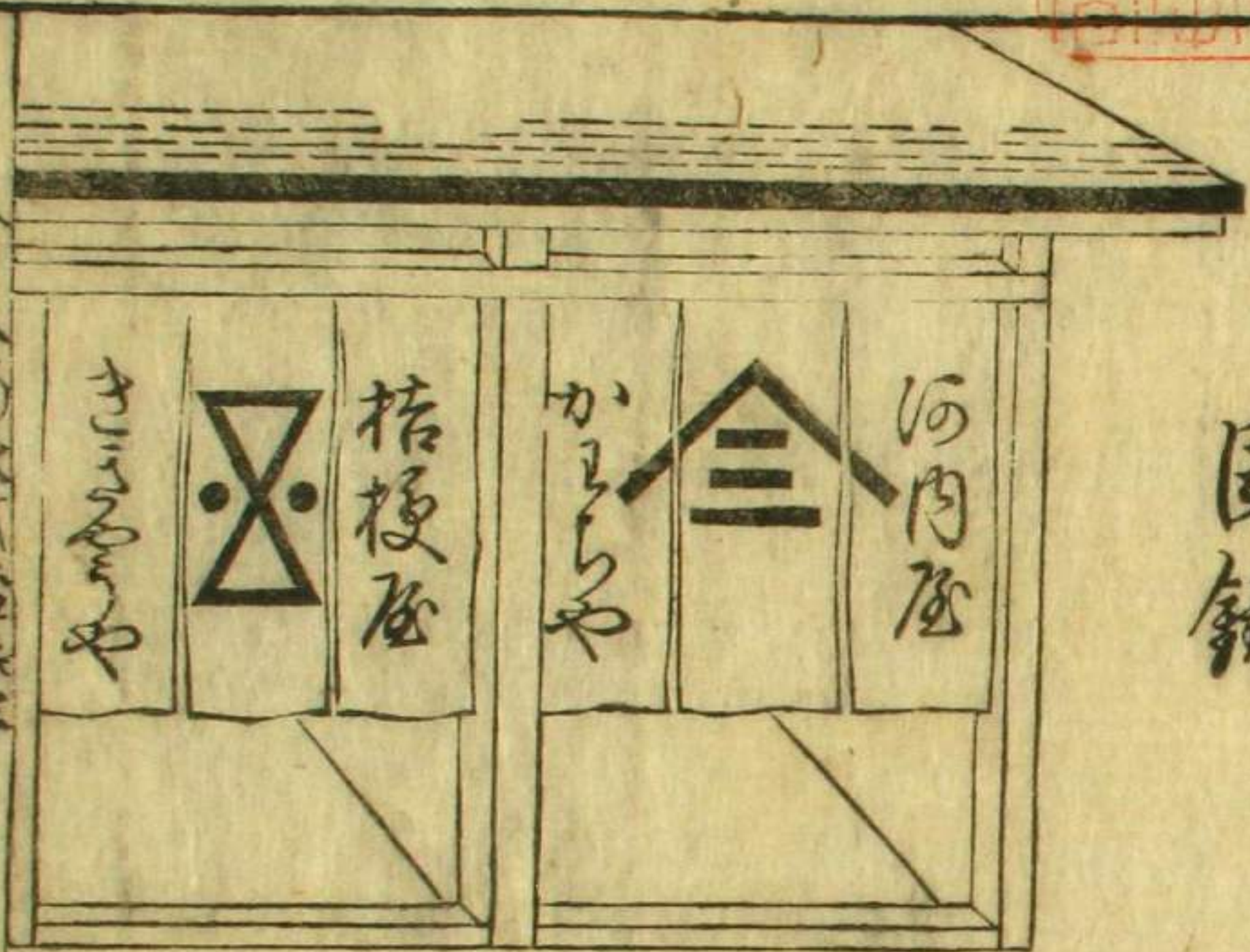
2.063
2





日本新永代巻之二

目録



六十余州紙は巻男

難^がた^おき^のの^ちさ^をを^かた^まり^て美^いさ^き

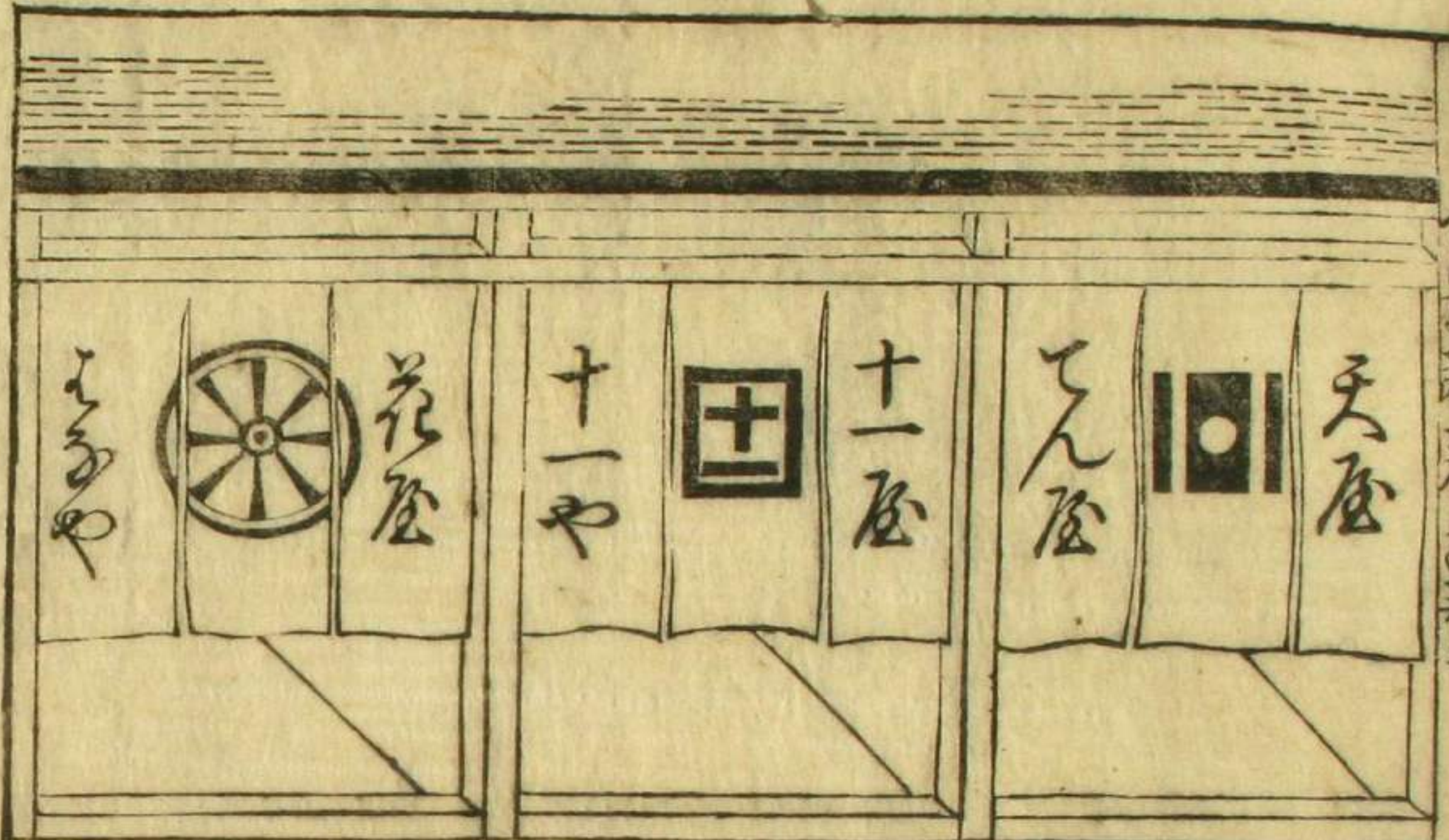
人^まは^らし^めぬ^質屋^のじ^すり

佛^{ぶつ}の^ぶを^かり^て紙^{かみ}飲^いた^絶

富^{とみ}中^{ちゆう}の^あか^を照^てと^まり^て美^いさ^き

江戸^{えど}の^いは^れか^もち^りな^る者^{もの}子^こ

郷^{きやう}庭^{てい}文^{ぶん}庫^こ



肉体的英皇と大又間氏家
 万端の病る一切をいふ
 教養の書并に隠れなき又屋

高の表裏に社会の学法
 小判のよりとり物純よ紙の火
 田系串此さこ別てま来はあき用

心とて持者此體に代はれ
 浮世流は角屋あ九からあはれ
 わづまうりや坊は信生と町甲

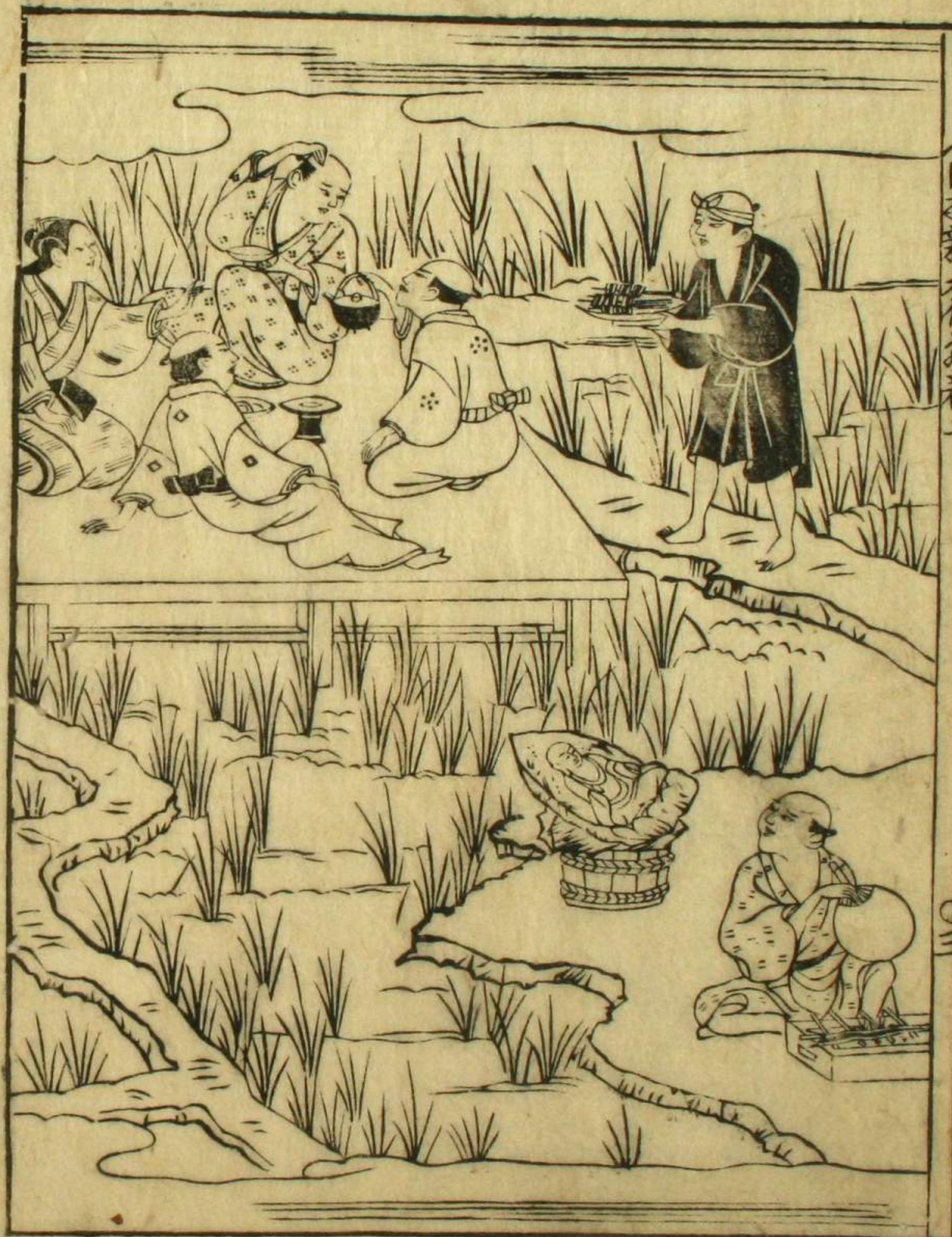
日本新永代巻之二

六十余列紙の本巻男

泰平をたむせ廣く人れゆくしてあ代何事わじ
 芸湯わりて中く通判の事あては高を人よとととさ
 れて坊のめ事よわらむと方すえをを賞手にあら
 せややしくささぬの事うんよとお慈の働賃紙
 りらふ事くびあはらむと利の仕合ありてお外如
 金取をりしけし物うりうりす今の商人さうり
 串を耳よくべうびさうく傳信らさうりて
 坊とささぬとぬ御儀おまけ利功とていふ商人の
 お手は身よさくさうておとささぬ事とていふ愛は紙よ

河内屋長をわたりし者あり元来三人兄弟ありて惣
然の親の仕似を令續き其物の高賣妹の親親中
縁よつてそへばこまの情なくあつておぼやめ
商末子れ若業のふれを起しておぼの家やいふ
言積もすげあせごりの江戸橋子の二階造り
元子娘を養育目性よとてそりて紙をせ
出させ女房をびくせせてのら親に隠居して三
人の子をの世話をくられくらび若業生均格智恵
あておぼをらつぬか別をさかり紙賣よこさあり
人よお合徳の紙の出生事應申徳をこり紙あり
および乃の高を知りて若業よこさとさりとつらこ

はりの紙高賣わきわどのおりえららるるものり人
くひて款りさうが突をりり事をおめてさのさ
よふおむしひさのりあま商人のなと世方よあくじ
そを智ず終よ高のゆきさとりさず若業よ紙のせ
際からますせよ店札路へ入らと粹よ付合つて洞むら
まの若業もえなぬうこなれぬおらうもの分とてエ
面事よりあはらのささつらさあよなひて博奕
の方便よのせらまお若業目の現報よ三若業目此儀
派おきて建てらるのたこ家を負うらさるま女房
よの若業めかませてお飯屋といふ人の手代となり
人となとなくみるまらうエ西ごりよのせんとせ



は家乃長身代は奥付られて忍のまゝにて逃出さ
 せし所は新をうくくましく君がねまゝこゝろあ
 深うつと老とをめて死せぬ命をつかぐ事さりと
 かり不覚人世また老かなる方家の造りたる石
 黄門は及び合座をあげしまゝのさうづとこのす
 藤子の柵をあらじ連袂茶番舞揚らお初みら
 てふあ肉とそ大酒は喧嘩おしていづもの食の食
 悦本戸の酒たがねぶら留よを中よひりあせ
 てまよひとらさるぬさやうくまゝのくまゝあて
 那みそよを甘がり湯の酒よ香らうらうらと暮
 のもれら仏をぬらんで解のまゝの地舞堂の落

氣のうらりたる事よしくせむれ蓮池花らる河よの
あぢいひこら女房をだまして長門の権女所へ賣
てやり、兄の七郎のつぐまは又救切をててくつを
物とぬとて親のねらびをかんときし悪人あれを
駿河屋久なつてくつ男とせ二の悪徳と人よあへ
らちとあつものるせらるきさこくば久なつる代
せらのるこそを可ぬのを際をそと先へ鯉屋とて
よ悪くつ作偽りのまじ代よ何ちたつとよま
才傍帯のち系紀宗ありておんのまき悪しあさ
よ何ちたつを切殺ししそ男も自害してこそぬ
はぬ人より久なら令子子女傳ふ海づりよ流り

それともせらる小知人あり親方とぬ人のちま代
喧嘩してあつて、信信の性悪からあつたさ
がらつくよすもろ中よ久なつちたの仕合をておす
え手おまよつりて商賣よ物つとてどぞよ六七
百貫目の身とつへりつるされども一文不通の
男あり、僕の年季も飛文をえさくつらぬ事ぬ
が、いふので吾妻を久なつ目らうの業を分あま
とせいさうゆへ地よあつて悪切内おのお後お
まよきよめつけられぬねとてくつや久なつ女房
とついのまよやう不依の密通して、練衣をたつ
男よ毒をすんまとのすせて殺しつらふた久なら

日本書紀卷之三

うらみぬ金瓶とすけか今多路の石をさうとつを
因果のちがふおもしろくやねくやされた町内より
昔業をふれしうぬをたうひてねのえられ
をえたらが業をたれえをひて昔業へりくい家より
人なりとて亭あつたよひわらぬまじい後家とらよ
うぬをいひおしゆきよとて代をとも同きしてと
ち昔業をさうく合点せむ我もその業をいひよ
えたり業をたれあて方より仕度げて業をたれか
後家の時をたれをたれとて所附まう人あて
い後家へたれあてよけすべしとてやえたり法武
とたれてのんぶるぬつとてあつた後家と別合を

世よあまきかか仕方とへいさうふ知らぬさうて
男よあまきぬすよ人死のお身んすよと世を町
内よりへまらず家内の子代が若とて親この世
送りしとてかたなりぬくよえがらぬとていざら
よまきよたぬ内よあまきりあてがひんよま
ざりしとてさうして仕度お昔業と後家のまぬよあて
お業をたれて金瓶のあつたてのえとていふよま
うのえをさうしてぬくがもすつてぬくひあてたれ
花をゆきしゆすゆよ昔業の盲目とまり女房よ
まをいひしてを合せしとて人ならしめかへぬて
実体わらぬ金瓶とて富のわやうしうらうらあまの

朝夕よらそけりあめして津義をちり正志を
けしとていそいよそ人のいましめぞう板の氣
があまのち飯の人は後かされて二たび生かへゆり
ぬされたまはる氣よだまされて極女とありたる事を
いはずもいふ感として死しそる親の君までとせよ
わめぬぬらりよそいふ所町の賢女としてち飯の
人の自傷世しこれのあ的事をや

佛の若狭判らぬ欲れ絶

大坂よ生れて江戸よ揚ぶ京よ隠居してあざり
の苦勞江戸系しじりよと世も海月記よあせり
いそぬ天下れか下徳書の人の集り京の子目

兼大坂の住者奈よりうす毎日れ盤昌いお附の志
が代よ何れあふれたとして貪念とてさづけい
よる重敷の沖波よと動もさうゆそくごく人
へ一獲ととさず我又いりふさやうとわさざ一
舟のたさうさあうで巻後の安堵もさや長崎よ
船内海をめぐりしり江戸よ筋奥と悟ぶあうど
あくよさうさあうりあけりてさ利のさうれきよさよの
ふのうのよのさあうつあうして長崎へ積送り大分
の根けりけして家賃さる人けりお玉の水換とて
て管江江戸よいよさうさ一庵のき身して極本



柯校の格校屋として今冬本三文字屋よと肩を
 ちりちり商人の笑ふ小舟袋の時のちりちりを笑ふおぢ
 ぐらぐらの格校屋とこころ久固を来よわらせ求代去後
 と名づけて賣出〜ちりちりよさりと〜と〜とらびいぶ
 奇襲して名づけよ掃除の〜び〜と〜と油とこ
 らず〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ちりと油の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 家ちり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 の身よと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ちちち〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

日本書紀卷之三十一

日本書紀卷之三十一

七

格授^{さきま}厚^{あつ}は物付^{ものづ}られ高^{たか}の事を^{こと}しておうげと^{おうげ}か
り。身^みと仕^し来^きく。十年^{じゅうねん}はう^{はう}こよ^{こよ}三百^{さんひゃく}あ^あと^とせ
取^との指^{さし}あ^あい^い人^{ひと}む^むら^らい^いのお^お遠^{とほ}ま^まま^まド^ド才^{さい}つ^つむ^むは^は孝^{こう}
ひとつら^{つら}家^け来^きよ^よつら^{つら}う^うく^く化^けは^はゆ^ゆり^りを^をい^いす^す佛^{ぶつ}
神^{かみ}の事^{こと}を^をと^とあ^あら^らそ^そう^うよ^よせ^せび^び人^{ひと}の^の人^{ひと}と^と廣^{ひろ}く
あ^あら^らそ^そう^うよ^よせ^せび^び人^{ひと}の^の人^{ひと}と^と廣^{ひろ}く
如^{ごと}堂^{どう}と^と落^おり^りて^て造^{つく}り^りし^し大^{だい}工^{こう}い^いふ^ふ小^{せう}舟^{ふね}め^めと^とづ^づる^るた^たを
お^お傍^{そば}法^{ほう}具^ぐに^に預^よけ^けな^なう^う。さ^さあ^あく^くの^のて^ても^もん^ん事^{こと}し^して^て尊^{うん}徳^{とく}
如^{ごと}物^{ぶつ}一^{いつ}。格^{かく}授^{じゆ}の^のら^ら二^に十^{じゅう}日^{にち}た^たぬ^ぬよ^よが^が平^{へい}平^{へい}の^の来^き光^{こう}授^{じゆ}ゆ^ゆ
み^み朝^{あさ}の^の柳^{やなぎ}を^をれ^れて^て法^{ほう}人^{にん}登^{のぼ}り^りぬ^ぬさ^さり^りと^とへ^へ一^{いつ}字^じ速^{すみ}
ま^まよ^よへ^へ人^{ひと}お^お慈^じの^の合^が派^ぱを^をな^なか^かし^し現^{げん}前^{ぜん}二^に世^{せい}を^をい^いの^の事^{こと}

あ^あら^ら小^{せう}浅^{せん}ま^まう^うら^らと^と此^{こゝ}欲^{よく}物^{ぶつ}氣^きあ^あり^りて^て毛^けや^やど^ど仏^{ぶつ}縁^{えん}よ
ら^らう^うも^もさ^さる^る人^{ひと}の^の来^きお^およ^よた^たが^がふ^ふ主^{しゆ}花^けい^いら^らぢ^ぢう^うく^く聖^{せい}徳^{とく}の
男^{おとこ}さ^さり^りよ^よ勝^{かち}ぬ^ぬけ^けと^とか^かの^のて^て死^しを^をわ^わら^らう^うめ^めい^いふ^ふ小^{せう}慈^じ
慈^じあ^あえ^えの^の仏^{ぶつ}な^なれ^れた^たと^とそ^そ毛^けや^やの^の事^{こと}あ^あり^りて^てさ^さあ^あり^りて^て
ひ^ひ人^{ひと}の^のあ^あり^りて^てな^なり^りと^とす

格^{かく}授^{じゆ}の^の慈^じ魚^{ぎよ}の^の古^こ又^{また}右^{みぎ}に^に此^{こゝ}家^け

商人^{しやうじん}の^の何^{なに}も^もし^しら^らぬ^ぬ毎^{まい}日^{にち}お^お傷^やを^を受^うけて^て手^て性^{じやう}よ^よと^と附^つき^き
んだ^{んだ}ま^まよ^よ馬^{うま}れ^れま^まド^ドさ^さる^ると^と慈^じで^でて^て人^{ひと}の^のあ^あい^いの^の律^{りつ}を^を
と^として^{して}何^{なに}事^{こと}も^もし^しら^らぬ^ぬふ^ふう^うま^まり^りて^て人^{ひと}の^の跡^{あと}よ^よつ^つて^て慈^じの^の
者^{もの}柳^{やなぎ}ゆ^ゆ事^{こと}こ^こう^う又^{また}大^{だい}来^きあ^あり^りて^て主^{しゆ}人^{ひと}よ^よ換^かけ^けぬ^ぬり^り
や^やの^の者^{もの}へ^へお^おさ^さり^りの^の引^ひ負^おを^をも^も埋^うむ^むじ^じう^うと^とや^やし^し。又^{また}よ

多列敷たれいしきが、いふ玉の巻流まきりゅうして、まへさうごせに、あ
 秋あきはなぐ月つきの、もど先まへと、張はり玉たま巻まき屋やの、り人ひとは、後ごよ入いり
 さ、こり、洞あな糸いと糸いと紅こう花はな喜き草くさ、練ねのみ、りこ、津つ貝いに
 じんそ、卯うさ、ぬぐの、商しょう賣う、同どう丸まる、乾かんを、あ、ら、ぶ、な、ま、の、越こ
 後ご茶ちや屋や、山さん、較かく、越この、新しん拍ぱくを、出い、入い、て、後ご賣う、商しょう
 強かうよ、毛もう若わよ、細こく、と、つ、り、と、は、ら、る、事こと、之これ、押お、中ちゆう、天てん、屋や、と
 ころ、は、ら、ぶ、め、い、ら、ぶ、り、人ひと、若わく、と、あ、る、り、賣う、賣う、の、越こ
 と、び、門かどよ、そ、の、事こと、あ、く、お、の、同どう、屋や、れ、下した、ま、よ、つ、て、
 や、り、く、目め、和わ、福ふく、松しょう、政せいの、私し、の、の、と、さ、な、を、こ、と、場ちやうの、ゆ、り、よ
 阿あ、ら、ぶ、と、ま、う、よ、草くさ、カ、是これ、の、あ、て、近ちか、自みづか、身み、よ、家いえ、業ごう、た
 國くにの、商しょう、人ひと、を、引ひ、流りゅう、敷しき、よ、賣う、と、あ、ら、ぶ、り、人ひと、な、さ、さ、ん、と、



同位と知り、流三右衛門といふ名をあらざるは、かき表口
 亦又る表口又十又ると、家と花と小建つて、臺
 雨のち、種だ、りめて、見る人の目とをさうり、ぬき味、嘴の
 支配人、薪、炭、り、法、た、酒、肴、の、な、り、料、理、煮、方、の
 役人、椀、家、り、の、妙、を、と、い、つ、り、菓、子、の、さ、ら、さ、だ、を
 この役、茶、の、り、の、役、湯、及、役、又、ハ、役、表、遊、四、の、男、
 高、代、務、主、役、金、派、支、配、方、性、附、主、代、お、儀、ゆ、云
 法、り、一、人、又、一、役、つ、ま、い、て、物、の、自、由、成、く、の、い、は、つ、
 つ、つ、つ、つ、つ、つ、亭、主、と、申、禱、と、言、て、が、も、勝、氏
 の、さ、ず、り、肉、義、ハ、う、う、い、ぬ、書、者、と、して、居、り、と、い、れ、ど、
 三百六十日、笑、つ、り、て、後、の、う、い、ふ、と、知、じ、と、い、ふ

と、つ、つ、の、同、位、と、い、各、別、人、の、接、遇、を、と、り、身、を、大
 事、よ、う、け、り、り、社、交、殺、つ、つ、り、と、い、く、あ、つ、人、よ、一、り
 つ、つ、つ、つ、一、壺、京、が、り、の、風、流、女、流、と、い、へ、て、是、
 又、朝、夕、の、務、仕、を、さ、せ、夜、更、を、と、ま、せ、肉、虎、の、つ、け、を、
 そ、う、人、と、合、熱、つ、く、り、て、京、ち、板、の、道、を、女、と、い、ふ、よ、ハ
 何、つ、ど、落、つ、つ、さ、た、り、あ、よ、て、人、の、い、り、あ、や、も、よ、恋、を
 り、と、め、ご、玉、の、女、命、よ、ご、し、ら、じ、く、と、れ、り、一、流、お、か
 家、よ、入、ら、じ、高、人、の、い、く、又、子、あ、る、別、よ、と、い、ふ、り
 ち、り、す、つ、つ、の、お、場、と、定、て、賣、買、よ、エ、ま、を、と、ら、
 と、い、り、件、の、務、仕、女、の、名、と、い、ふ、の、い、ま、で、と、い、ふ、
 つ、つ、つ、親、り、と、い、ふ、て、女、よ、あ、り、く、い、ひ、入、る、は

情して酒の味系らりてさうしあうし
と小瓶之味線のあいの手を自惚して商へ
の酒方事せうぬぐ大悪しとさうしうがさう男ら
後之神のうらうし酒つやをさうと酒よん先
とこれ賣しと買ふと接してさうしめての情
突よりり手代へ親うと例しきよみりてよ
しかさ借族をお産よさうさうだる商人と
度く肉と愛なりとさうさうとあそぶよし

商人表裏の仕合の旨

悉く身を獲付られぬがよこさうと名のとほは京町
背へ京より爰よは人廟をさうさうせよさうさう

をあんぞとさうや時うらうりおらうて今ぞ車
借るこの情味あつてさうぬ金整いよ孫の目流
のさあそさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
の時と京柳うらうりかよ男びりりハ十かひさ
漢さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
して目ごの通海漢さうさうさうさうさうさうさう
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

そのまじに内院を若くはせす人めの園を等し
 けいむらりれあすけ傾城の貴ものよとれける事
 とをも地入あよましむ事びう人のよふる又ま
 さや十かたこれより引て疾ゆりしあのとと
 と女あさうすおまふまうい事怪紙あひる事
 三年の末よ二夜あてくまうまうりよ實て遊ぶ
 事あひるまをまういに強かうさかといふよそれの女
 のまのちぬら申さむらうつらと申あてを方うこ
 りとつらうと風つらうとすすく髪ゆいど寝たよ
 物とあすおれあよあを道うずき十かた
 卵よ男へあひらふらとせけり指入がらあを

へあひる事あひる女あしとら事だれと下よんあろ
 たらん申あうとよ事あろらんよ親うこの傍あけ
 とつとあておせのあああくはたのよいよあひら
 大津より弟へのかりあり十かたまぬまうりて高貴
 の後んをがくれあまうしとををせさ事にあす
 ちいんあをらうりあうく候と也余下の終相して
 別使を大らうけりてあはちれた十かた若より
 ねあまのある事とあまうい高よのらんをせて
 一とせ金あま下のらういよと一夜と換をせびあ
 ろ取うとあひ入と合せあひらくあ金とあて人
 あらぬ金取をりけりあはあを實あまうり

世のなかへもゆいく、さうぬおのれかきもなせよさうさ
 かり、は商人の根つゝもさ事をかゝる人ありとちやしたて
 作能をささうもさるもよ商人の一人あきあきあり、其
 舎よ七めこの料理をわづらひ、飯子の束をよは寝さ
 れたどとそさあもせららよちる事とまきまど、これを天乃物とい
 地形事とすたり、十がさ房、勤めせしめよ、奇得ぬ
 うま、ちやく人よ強して、賃仕するさうなむ、まめでり
 事の仕事、あひやうられ、人の老はよ、物といひあらた
 して十か、自能と分限よなり、十二の糸と、糸海よ
 ひらぐ、一年く、さう門のまよ、あはれといひ、さうして
 身代、かゝれを、ねよす、さう、おんま、さうさ、げ、家



日本料理代巻二

の安産と十年とこいど子のあさ事んさうして佛
老の通の同ト高貴をたぶ男と書出子して身代
譲りけり時町中を合らるゝ七百三拾式貴同然一
かよ半分よあつてさ手形取捨七貴四拾式
伝書の卯の家ニテお人のあひと遠ひとさけ
人の取取をりとも事といふ秋田玄庵といふ小
児醫者のころうけ又墨山といひる一方漢を
いふおんげん妙をささるゝもたぶ女房をねも
んでそののいびりむりりに氣さうり一時をん
くわる付の若くは二日三るところと高貴よかこ
り身代より負れをその火よりよ物さねとまれ

万津の栞ふらびて信あつ小僧のさせをりり
とく信仕也あして信をさきのこまこと思ひよ
通ふまらこの便りらうこそよまれとあね松平
よ短毛して手ああの栞さぶよ実りきこぶね
くさるもさうとよさる夜宿よ信ひを商のわく
正志の賣喰あしてやうく若山が信儀又安のあつ
るよそとまう大津のたきとせをと仕ぬひ日乃
信よ田系やうしてあいのさあて勅ちの力其印の
男よさあつてさうしてさく信味して何か
とらひぢりりりよ今の女房よさらけのころものよ
をあらうも信とたうとわいりしりさるよ抱付ね

の事への言目は命息しと書れよりしてござら
て一掃念も賣らな持てんを強ゆるこの今世堪
ぬりねと能知り人の成りてしむぞう

ふをさうく抹香の糖三代めの子更

常よれりよ江南三月の裏鶴鳴啼而百苑香
しくお江戸の地廣く人多きれを男の事易く
とむりれりよ悪く主代りよ法をよりよ海
の及よ練磨しく高城入こそ申しく通例の如
きよとて及ぶよりよ何とどと一とびふりてを
かひり男播列娘はよ回りに二門親親よま
歌よけりて母の妹よとて男が如母二階所心
と

つら異様一の海始めて安楽な男ありとて
般えといひ甥子のよりしてありれよくけ
何とぞ世をさう事をいふせよがいのうう
殺伐の座をあらいて合カせんとの以情痴よ
やどありてまごごくおぢめさうん何さう
はるのそよよとんと意取膝のらやわれど
今の世よま百もや二百もあていうかく
よ渡世のいく高賣りや一や二や三や四や
水な身もやよなぐれて色よらうとて
さあり新しとる指まぐはかきとて
しと市よありてこそ感行ありし男あり

魚好が羽をさひかしく商人のうりばにせざるをたぬ
べうど重てりいぢれくるもかれど今日勿くて
唯もぬ金銀をとりけり也是世の百ものごとく
つひにこそねりちこれとぬのあつてまうあふ福の祓や
希りぬいもんがわくのる塔の檜み味く日は枯て
兄づらうとを方丈へ引ぬらする塔よ忌日附付
てあはれど毎月檜とたてくあをわたりたちり掃除
料をのくしり八錢づつ成さようけらうとてい
つぶんちり事として子連とねがへ納て坊ぬねを
枯ら檜と抹音よまらうせり也を賣よえんも
よわらうまらう二人にらやうくは事よあつてわらう

後負のらう十人してなると檜音をうらう
つとせしめて大分の利をわけてお町の門際よ少
尺せをわきあふ布の包紙ありと看板出し令
子百丈より白紙紙をぬきぬき或るを包紙を
る二封二錢づつの包紙して封トちよ紙紙の
しつらぬぬの石よ小玉拂座の時分
もろよ面大うさうさうと氣えんよ
皆いよせよきあて目ごの商京元三井う現紙を
あしすけをとたうむ或るの包紙をよ下下あり
てとよあの中刺を花授よまあつたり或る
て路へりる事つらくおあやうく合後美の義

荷米と實地酒販と知り又吉の入用と仕送り十
年たぬ肉よ二石貴月の身神姫流る河の花を
とよふお智いさくひんくよ知ぬ玉うそは橋がどぬす
とるさめていやく中玉よまきうり伯母の親を嫁り
けしてを重んぶまを身さよ入るさうさう。同
乃橋をくよ男は江戸よさうりてさびいお大石の此月
字となめて袴まきて大子履とりとつきて飛河
さしが本引町の目の出れ流るよよ是夜さるさう
をなまふ金銀とまきとて所友のちあひわくさうて
自然と江戸よとあしとさあさうくが中へゆく流流よ
つとくさんさうがけさうさうい神をくくさうさうく

髪と茶色の色友森尾他子と了馬帽子おりよ
くまうれてどくよ系坊とさかり指お探の紗司
て西崎東家の酒よ裸とさうり肘附踊のりまき
人の體のそ歩と念ぐるおもをまあと嫁りの
身さうさうさうたてまき

云巻し向

とあね氏

日本新水八巻卷之二 終

